

特集

今年が独歩志に取付、本誌再録

国木田独歩の晩年

— 佐伯出巻・上京(中略) — 茅ヶ崎の終焉 —

会員 神野 幸人 (在鎌倉)

昨年七月の「佐伯史談」第一一四号巻頭に

「国木田独歩の足あと」として、佐伯独歩会の再発足を知ら

る。佐伯に於ける独歩の研究は、故小野茂樹先生をはじめ、

多くの方々がなされていゝので、佐伯を離れて滞京し、

新館・藝展・療養・病床として、逗子・湯ヶ原・茅ヶ

崎と、寸履を置いてゐる。そこで、湘南に於ける独歩の足あとを探ることとした。

佐伯独歩会の一助になれば幸甚である。

(一) 佐伯を去るの記

明治二十七年七月二十九日(日曜)

吾が帰國の期は迫りぬ。

対清事件にて開戦説紛々。朝野騒然たり。

二十七日の薄暮、坂本邸にて馳走せられ……夜や、更けて車に乗り帰宅。市街より葛巻に至るの間、里程殆んど一里、四方まことに寂然。車上瞑想して人生の荒蕪を思ひ、老翁の事など思ひつづく。

七月三十日

昨日少年生徒九名と招きて昼飯を馳走し、半日を海

水遊び、少年等と共に面白く送りぬ。夜、教会に出席して感話す。

八月五日

八月一日佐伯を出発して、二日の午後三時半頃三ヶ

浦に着し、其夜日茲に一泊せり。

薄暮、松山を見物す。出兵の光景を目撃せり。三日の午前十一時三ヶ浦を出発して、午後四時玄島に着し、直ちに乗りかえて九時帰國す。

戦場の報しきりに到る。(八月一日対清開戦)

(二) 在京略記、後軍記者

約一か月、両親のいる柳井口過ごす。

九月三日、柳井を立つ。九月二日、佐伯の四少年出郷の電報を受けたり。途中合流すべく出立す。

九月六日、宇品で一泊になった富永・山口を併って東京に着き、麹町三番町北に下宿

(途中考振の友人大久保湖州を訪れてゐる)

(出) 是河平吉と山口行(るん)は、不幸にも後藤死富永

徳彦日本御駒之の教会に在りて牧師として名をあげ、著書日記あり。展間明は国民新聞記者

長とした後、東京郊外の社会事業に専らする。

九月十一日、おくれ佐伯から到着した展間・高橋(後)に並河)それに弟収ニを加えて、牛込区南横

町に転居、六人で自炊生活を送る。

(出) 展間明の思い出し「かまども無ければ釜もない畜

生生活で、神樂坂まきパンを買いに行つた。それが半

斤一銭三重といふひといふ入で、すいぶん質素な

生活であつた。九月十七日、国民新聞社に入社。富永・展間も民友社

の乗送隊として出社してゐる。

九月二十三日 麹町区三番所に転居

十月一日 従軍記者としての乗艦を、人見市太郎にす

すかられて承諾す。

十月十日 麹町区平河町に転居。

十月十三日 午後九時五十分新橋発西下、広島に向う。

秋雨の中、収二、人見市太郎、佐伯からの門下

生富永・展間らが見送る。

十月十五日 午前八時過ぎ広島着。

宇品港にて西京丸に乗船

十月十六日 朝六時 宇品出帆。

翌十七日 朝佐世保に着き、午後五時いよいよ

大岡江口向い出帆、同十九日大岡江着、夕方千

代田艦に移乗した。

以後、従軍記者として日清戦争に於ける海軍の戦況を
約半歳にあたりて通報し、翌二十八年三月五日晏に帰り
退艦一夜。

そして六月、佐々城信子とはじめ知り、その交際は
急速に深まる。その後、次のように展開した。

(一) 戀愛・北の旅・結婚

(二) 返子松山の柳屋での新生活(四ヶ月)

(三) そして遂に破婚(明治二十九年三月独歩二十五才)

(四) 鎌倉の足跡(散居・散步道)

(五) 湯河原にて 健康を害していた独歩は、鎌子

一湯河原一西大久保一茨城県茨所、そして

茅ヶ崎の南湖院へと転地療養をへつした。

(注) 佐伯史談の編集子曰う、独歩がその長くもない人
生過歴の末肺患によつて茅ヶ崎南湖院で改して

今年日滿七十一年目、去る六月二十三日の独歩忌に由
り、家会者一同はこの神野会員の書かれたイ
の提供して好評であった。特に上巻(二)一七
頁有略して、次をもつて独歩を追悼した。

(六) 南湖院

明治四十一年二月三月、独歩は人々のすすめて、肺結
核治療のため茅ヶ崎の南湖院に入院した。結局これが独
歩終焉の地となった。

六月二十三日の死亡の日まで五ヶ月ほどの南湖院生活
だが、独歩は時すでに重症で、文章どころではなく、満
足に散歩も出来ず、茅ヶ崎の海を蕨床から眺めるだけで
あったらう。

私は、鎌倉から江ノ島と相模湾沿いに走る、湖南遊歩
道路を西に下る。

迂闊田池を過ぎ、一きわ高いホテルを過ぎる頃より、
松林が多くなる。しばらく行くと、海岸に食堂・スタン

ド・釣具店が一団となった所
があり、それを過ぎると、白

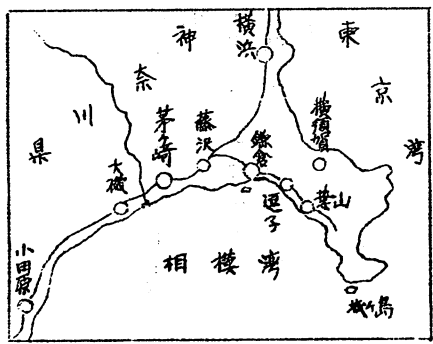
砂青松の彼方、群礁に一つ左
け高い鳥帽岩が浮かぶ。

この絶景を左に見て、服を
右下転ずると、松林の中に高

く無縁塔が一基、天を衝いて
いる。その奥に現在高層建物

がへくらくれている。南湖院先
院である。

明治三十一年、高田附安に



よつて建設の棧を打たれた南湖院は、その敷地五万余坪に數十棟の病舎が建ち並ぶ、東洋一の結核治療所である。その南湖院も、昭和十九年には海軍の一部接收され、二十年二月九日の冊安の死、五月海軍に全面接收され、終戦後は進駐軍の占領するところとなり、その灯を消したか、今も松林の間に洋館風の病舎や付属棟が数棟残存している。その中の一、冊治三十二年建築の第一病舎が今もある。独歩が入院したのは、明治三十八年竣工の第三病舎であつたが、この建物は今はない。

「茅ヶ崎の砂は、鎌倉に比し色黒く粒大なり。風物荒冢たる所以なり。」

茅ヶ崎の空気は荒し。肺を病む人には適せざる如し。又湿と乾との差も甚し。

茅ヶ崎は松と麦と桑と甘藷の外、目を慰むる物なし。「余は東京を去るの日、その地に接吻せざりしを悔ふとす。嗚呼、東京の酒、東京の霧、東京の魚、東京の響き……」

と、独歩は東京を恋うる結核患者の悲歎を述べている。

田山花袋の紹介で、独歩の「病状録」と記した真山青花日、独歩の最後の日を次のように記している。

「この通信ごに終る。吾が崇拜する岡水田独歩氏は、今日、六月二十三日午後八時四十分、相州茅ヶ崎南湖院第三病室に瞑目された。」

故人の遺志もあり、かつ家族の人々を病室に移すに忍びずして、遺骸は収二氏と二人して、これを相架に乗せて、雨後の真黒な松林の中を別荘へと移した。別荘とは独歩氏入院後、家族らの飯所に棲まわれた海浜の小屋にて、岡氏は一度も見られた事が

まい。屍となつて始めて自分の家へ歸られたのだ。この通信は午後九時四十分、その六畳の一隅。遺骸の枕頭において書く。

旅の上、知る家はなし。夜はふけたり。屏風その他を用意もない。

炬を北枕に直して、蠟燭一基、香爐一縷、白ハジケ子を顔に独歩氏は、兩掌を胸に合せて、白絹の浴衣のまま静かに林上に横たわっている。母堂まさ子、夫人治子、令弟収二氏、岡夫人賛子、きみ子、青果の六人、寂しく通夜す。

令息・令嬢は最君の死も知らず、小さないびきして次の八畳の蚊帳の中に眠つていられる。

嗚呼、独歩氏越く。明日は友人知己の人を来らるべし。諸方に打電す……」

と。

南湖院の東、市営野球場の南側土手に、岡水田独歩の碑がある。一生に一度だけ他人にすすめられて来た茅ヶ崎で死んだ彼を弔うために作られた。

独歩追憶碑 (彼の似顔絵と「渚」の一節)

永劫の海に着てゆく
世々代々の人の流れが
僕の前を流れていく

と刻まれている。

茅ヶ崎の、独歩を偲ぶ会の人々は、毎年六月二十三日、この碑前に集つて弔すという。独歩、よつて瞑すべし。行年三十八才。戒名 天真院独歩日哲居士。

佐伯と出て十三年十か月、七十三年前のことである。(終)